

教職課程最終段階の学生は教育現場の何を知りたいのか

岩城 裕之¹⁾, 竹村 理志²⁾, 上岡 栄二³⁾, 山嵯 弥生⁴⁾
 楠目 安由⁵⁾, 池川 真妃⁶⁾, 友永 しのぶ⁷⁾, 黒瀬 小百合⁸⁾

1) 高知大学教育学部・教師教育センター

2) 南国市立香南中学校

3) 西部教育事務所

4) 高知県教育委員会事務局小中学校課

5) 高知市立介良中学校

6) 南国市立後免野田小学校

7) 四万十町立窪川中学校

8) 高知市立城北中学校

What students planning to obtain a teacher's license
 want to know about life as a teacher and the field of education

IWAKI Hiroyuki¹⁾
 TAKEMURA Masashi²⁾
 KAMIOKA Eiji³⁾
 YAMAZAKI Mio⁴⁾
 KUZUME Ayu⁵⁾
 IKEGAWA Maki⁶⁾
 TOMONAGA Shinobu⁷⁾
 KUROSE Sayuri⁸⁾

1) Faculty of Education & Center for Teacher Education Development, Kochi University

2) Nankoku City Konan Junior High School

3) Western Education Office, Kochi Prefectural Board of Education

4) Elementary and Junior High School section, Kochi Prefectural Board of Education

5) Kochi City Kera Junior High School

6) Nankoku City Gomennoda Elementary School

7) Shimanto Town Kubokawa Junior High School

8) Kochi City Johoku Junior High School

要約

高知大学で教員免許を取得する学生の集大成の授業「教職実践演習」で、教育学部以外の学生を対象に、現職教員との懇談という企画（回）を設定した。その準備として、「現職の教員に聞いてみたいこと」について自由記述形式の調査を行った。本研究は、その回答を分析することで、学生たちが教員や教育現場の何を知りたいと思っているかを分析するものである。分析の結果、「生徒」「教員」「授業」「部活動」「保護者」「時間」が主要トピックとなり、「より具体的な教員の仕事の情報」と、「関係をどう作るのかが試されるような場面での生徒・保護者への対応」のニーズが高いことがわかった。とりわけ、教員の時間的・能力的な負担（専門外の科目や部活動担当）について「本当のこと」を知りたいという学生の傾向を読み取ることができた。そして、教員が民間企業就職かに悩む学生の姿も垣間見えた。

キーワード： 時間的・能力的負担 生徒 教員 授業 部活動 保護者

1. はじめに

本稿は、教職課程を終える学生が、何を知りたいと考えているのかについて報告するものである。教職課程の集大成と位置づけられる教職実践演習で行った、学生と現職教員との懇談の準備として、「現職の先生方へ聞いてみたいこと」を調査した。そこに記載された質問を整理し、報告する。

その目的は2つある。

まず、教職を目指す大学4年生の学生たちが何を知りたいと考えているのかを知ることで、今後、筆者らの勤務する学校現場で教育実習生を受け入れる際の参考にするためである。教職大学院に在学している現職派遣の大学院生にとっては、勤務校に戻った際の教育実習生指導に役立てられるであろう。

次に、教職実践演習という授業をはじめとする、大学での教職課程カリキュラムを考える上での参考にすることである。

2. 調査について

2.1 実施の背景

教職課程の最後に、その集大成として教職実践演習という科目が設定されている。高知大学の中・高校免許取得者への教職実践演習（教育学部をのぞく学生対象）では、その第14回目に、教職大学院に派遣され学んでいる大学院生（岩城を除く本稿の執筆者全員）と学生が懇談し、学生が自由に聞いてみたいことを聞くことができる時間を設定した。

平成31年度までの教職実践演習は、高知県教育センターの指導主事の先生方の協力を得て、模擬授業を中心に各教科で実施する内容であった。しかし、働き方改革による指導主事の先生方の負担軽減、各教科観での指導主事の先生方の業務内容にばらつきがあったことなどから、内容を大幅に見直した。

令和2年度は変更の初年度にあたり、教職大学院現職派遣院生との対話は今回が初めてであった。そのため、学生に対して事前に、どのようなことを聞いてみたいか、というワークシートへの記入をお願いした。学生には、ここに記載された質問事項を基に、質問内容を分析し、懇談会の準備をすることを通知した。

2.2 回答の形式

教職実践演習で懇談会を実施する前2週間をめどに、学生に自由記述を求めるワークシートを配布した。配布と回収はすべてオンラインで行った。ワークシートに記載した質問文は以下の通りである。

「教職課程のほとんどの授業、実習が終わった段階で、教育

現場についていろいろなことが気になっていると思います。

そこで、12月14日の教職実践演習では、高知県教育委員会から高知大学教職大学院に派遣されて学んでいる現職教員に来ていただき、皆さんから、教員の仕事についていろいろと聞きたいことを聞いていただく予定です。

現職の先生方も準備がありますので、事前に、皆さんが現職の先生方に聞いてみたいこと（学校のこと、教員になってからのこと、教員を目指すときのことなど）を、箇条書きで書いてください。素直に聞いてみたいことで構いません。なるべくたくさんあればうれしく思います。（例 指導したことのない部活の指導は断ることができるのですか？など）」

この質問文の下に、真っ白な記入欄があり、学生はそこに思い思いに記載する形式である。

質問の個数を指示していないことや、自由記述としているため、数量的な分析には向かないデータである。そこで本稿では、どのような記述があったのかを分類し、分析することにする。

2.3 データの分析方法

学生から寄せられた記述は、箇条書きの自由記述である。得られた721件の自由記述データを分析対象とした。

まず、KH Coder を利用し、データの大きな情報を述べる。

まず前処理を実行し文章の単純集計を行った結果、789の文が確認された。また、総抽出語数（分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数）は15,240、異なり語数（何種類の語が含まれていたかを示す数）は1,378であった。

しかし、この中には、同じ意味を持つ語に複数の表記が見られるものがある。例えば「教師」と「教員」、「部活」と「部活動」である。この2つのペアについては、分析の前に前者は「教員」に、後者は「部活動」にまとめた。

次に、複合語を検索し、以下の語を複合語として扱い、文書全体の語の出現頻度を求めた。

このデータは2.2で述べたとおり、自由記述であるために質問の数そのものを単純に扱うことはできないが、トピックをさぐるためのキーワードを抽出するための処理として行った。

保護者／部活動／教材研究／不登校／教育実習／生徒指導／コロナ禍／学習指導案／距離感／高知県／民間企業／学級経営／学級崩壊／学校教育／学習指導要領／関わり方／教育委員会／教育現場／研究授業／校務分掌

上記の処理を加えたうえで、トピックを探るために、出現した語を頻度の高い順に並べ、10位までを求めた。

その結果を表1として示す。

表1 頻度の高かった語（上位10位。数字は出現数）

生徒	201
教員	191
思う	102
先生	95
授業	89
時間	65
対応	63
指導	61
部活動	53
場合	51

表1にあがった語を元に、名詞をキーワードとすることにした。名詞は主語になれる品詞であるため、トピック（主題）となる可能性が高いと考えたからである。

表1の語のうち、「思う」は動詞であるためキーワードから除外した。次に、「対応」「指導」は、名詞の可能性もある反面、サ変動詞の可能性があるので、名詞であっても「生徒・保護者対応」「生徒指導」のように「生徒」「保護者」などの語を対象にすることでカバーできると考え、キーワードから除外した。

そこで本稿では、「生徒」「教員（先生）」「授業」「時間」「部活動」をキーワードとし、分析する。さらに、表1には出現してはいないが「対応」に関連して「保護者」をキーワードに加えて取り上げる。

分析方法は、それぞれのキーワードを含む記述をすべて取り上げ、内容を分類することで、学生が何を知りたいと思っているのかを整理する方法をとる。

文書の基礎データを探るために利用したKH Coderを引き続き利用し、テキストマイニングを使うことで全体的な傾向を見る方法もあるが、本稿ではなるべく丁寧に学生の意見をすくいたいと考えたため、その方法は採用しなかった。

3. 分析

3.1 キーワード「生徒」に関連して

「生徒や保護者対応で気をつけていること」のような生徒や保護者への対応についての一般的な質問の他に、具体的な場面として次のような質問が見られた。

まず、不登校の生徒への対応方法についてである。例えば「不登校の生徒の対応は具体的にどのようにしていますか？（家庭訪問など）また、今までに不登校の生徒に対応した中で一番印象に残っているエピソードはありますか？」のような不登校生徒の対応の実際の方法・様子である。また、

「クラスの雰囲気に馴染めない児童・生徒には、どのような声掛けや対応をしていますか？」のように、学校やクラスに入りにくかったり入れなかったりする生徒への対応について知りたいというもので、教育実習ではなかなか関わるできないような生徒、場面である。

次に、具体的な問題行動をあげ、それへの対応方法である。注意すべきであるのにどのように注意すれば良いのかわからないというニュアンスの質問であった。具体的には「授業に身が入っていない（他のことをしている、ぼんやりしているなど）生徒へはどう対応しますか？」「言うことを聞かない生徒への対応」などであった。

教員として生徒に何かを注意する時、生徒との関係をできる限り崩さない方法（あるいは崩れてしまった場合の修復方法）を知りたいという内容もある。「生徒を叱るとき、注意するときに気を付けていることは何ですか？」「先生は叱らないといけない場面があると思います。私は叱るのが苦手なのですが、叱る以外で生徒に接する方法はありますか？」などである。年齢が近いだけに、生徒の叱り方、注意の仕方は難しいようである。

また、生徒との関係が悪くなった場合の対応についても様々な質問があった。例えば「そんなつもりはないけど生徒から『先生は自分にばかり注意する』と言われたときの対応」「担任したクラスの生徒または生徒指導等で継続的な関わりが必要となった生徒との関係が悪くなってしまった場合、どのような対応をとられますか？例えば、『この先生には話したくない、関わってほしくない』等と拒絶されてしまった場合です」など、生徒との関係が崩れた場合の対応や、「どうしても接しやすい生徒接しにくい生徒がでてくると思いますが、生徒の接し方に差がないようにするには、どういうことを意識していますか？」「相性が合わない（苦手なタイプ）生徒との関わり方」のように、関係を作りにくい場合への不安があるようである。これらは教育実習でも出会いそうな場面である。

このように、教員として関わりが難しかったり、関係が崩れてしまいそうな場面（注意したり叱ったりする場面）、さらには関係が崩れてしまった場合の対応方法や工夫が、キーワード「生徒」に関する2つめの質問の系統である。

3つめに、けんかやいじめの対応に関する質問である。例えば「けんかをしているので仲裁をしてくださいと言われたときの対処法」「いじめがあった場合、いじめられている生徒、いじめた生徒、両者の保護者にどんな指導やケアが入るのか」「いじめのような事態を見つけた場合、どのように対処するか。また、いじめられている生徒がそれを取り上げてほしくないという場合、どのように対処するか」といった質問である。これらは、大学での生徒指導の授業等で一通り扱う内容ではあるが、より具体的な場面を想定して、実際の対処の方法を知りたがっているようである。

さらに、同僚と生徒の板挟みになった場合のふるまいについての質問も見られた。「特定の先生に対する苦情を出されたとき」の記述のように、部活の主・副顧問で指導方法が異なった場合で、そのことを生徒から相談された場合や、学年団の教員で意見が異なる場合など、生徒と他の教員との異なる主張の間で板挟みになった場合の心配もあるようだ。

以上は学校の中での出来事であった。

この他に「生徒が異性の場合の対応で気をつけていること」「休日に生徒と偶然会ったときどのような対応をしますか?」「デートするとなったとして、近場で済ませるか遠くに行くのかどちらですか。あるいは生徒と出くわした時どうしますか」など、私生活と生徒との関わりをどう線引きするのかということも学生たちにとって課題であるようだ。大学の授業でも教育実習でも聞けない内容であるが、一個人として考えた場合、もっともな疑問であると思われる。現役教員が身近にいれば何らかのアドバイスはもらえるのであろうが、こういった、教職課程の授業では扱わないことをすくい上げる企画があっても良いと思われた。

以上、「生徒」をキーワードに見た場合の学生の主な質問は、①不登校、②生徒との関係を崩さないための方法、③けんかやいじめへの具体的な対応、④生徒と他の教員の主張が異なる場合の対応、⑤私生活での生徒との関わり、という5つの類型に分類できた。

3.2 キーワード「教員」に関連して

教員を含む記述を分析すると、大きく分けて教員になる前のこと、教員になった後のことがある。

まず、教員になる前のことである。

「教員を目指したきっかけや教員になった理由」「教員採用試験の対策にどのようなことをしたのか」が見られた。

「教員にどのような力が求められているのか」「教員をする上でこれだけは身につけておかないと将来後悔するぞということはありませんか」「教員になってから大学生のうちにしておけばよかったなと思ったこと」といった、教員になる前の心構えに関する質問も見られる。教育実習を受けて、「実習で会った素晴らしい先生は視野の広い方だったが、視野を広げるためにはどうすれば良いのか」という、具体的なエピソードを上げた質問もあった。大学のカリキュラムというよりも、それを越えて何をすべきかという質問であると解される。

このほかに、本稿で分析した調査が教育学部以外の学生であることから、民間企業との間で就職に悩んでいる質問が見られたことが特徴的であると考えられる。「もし教員になっていなかったら何をしていたか」等の他に、「民間企業に就職してから教員になる方が良いのか、ストレートの方が良いのか」

「民間企業から教員になった人はいるのか」という、民間企業から教員へ転職できるのか、そのメリットは?という類型の質問の他に、「教員から民間企業に転職した人はいるのか」

という、教員から民間という逆方向の転職についての質問も見られる。特に前者については、卒業後いきなり教員になることへの戸惑いがあるように思われる。

次に、教員になった後のことである。「教員になって良かったこと」「教員になって苦しかったこと」という、教員になってのメリット・デメリットの両方が見られたが、全体的な傾向として、教員になることに対して後ろ向きの内容が少なくない。教育実習で教員の仕事の大変さを実感し、「教員になって大変だったことは何ですか」「教員をやめたいと思ったことはありますか?また、ある場合、その理由は何ですか?」「教育実習の時に、担当教員からやりがい以外で教員を続ける理由はないと言われたのですが、ほかに理由はありますか?」のような質問は少なくなかった。

具体的な不安のポイントには2種のがみられる。

まず、近年教員の働き方が問題となっていることを反映してか、働き方に関する内容に様々なのがみられた。具体的には「教育実習先の先生たちは20時を過ぎても帰る気配がありませんでした。どの学校でも、先生たちは毎日残業しているのが普通なんでしょうか?」「定時に帰れる日は1週間のうち何日程度ありますか」といった勤務時間の実態に関すること、そして制度上の問題として「働き方改革が言われているが実際に何か変わったことがあるか」「定時に帰れる仕事量をなぜ学校側は与えないのですか?また1日で終わる仕事量を持っている先生方は何割いると思いますか?」などを指摘する質問もある。さらに、「教員であることを家族や周りの人はどう思っているのか」という、家族等との関係に関する質問や「教員と家庭の両立に自信がないのですが、大変なことや両立するために心がけていることなどあれば教えてください」「飲み会には参加しないといけないのか」「教員は24時間教員である必要はあるのか?その境目はどのように判断すべきか?」といったプラベートと仕事の両立に関わることも見られた。昨今問題となっている、教員の働き方については、学生も大きな関心を持っている。この点について、「きれいごとではなく本当のことを知りたい」という学生の気持ちが伝わってくる質問群である。

次に、神戸市の教員いじめに関連してか、「教員間にいじめはあるか」「教員の人間関係はどうか」といった、職場の人間関係に関することも見られる。

働き方や職場環境への不安は大きいようであるが、「つらい時や教員をやめたいと思ったことはありますか?また、そう思った時の乗り越え方を可能であればお聞きしたいです。」のように、それでも教員をやる理由を探そうとする学生の姿があったことも記しておきたい。揺れ動く学生の様子がよくわかる質問ではないだろうか。

その他には、教員になった後の評価についての記述もあった。「先生から見て優秀な教員とはどんな教員か」「一年目の教員には何を求めるか」といった質問群である。

以上、「教員」をキーワードとする質問には、教員になる前後のことがある。

教員になる前のこととして、①教員になるきっかけ、②教員になるために学ぶべきこと、③民間への就職か教員就職かの悩みに関することがある。

教員になった後のこととして、教員の仕事の負担が大きいことに注目した質問がほとんどであった。①働き方（勤務時間、プライベートとの両立など）、②教員間の人間関係、③教員になった後の勤務評価である。①と②は負担の大きさについて触れるものが多数であった。

教員の仕事については、マスコミ等で何が話題になっているかということに加えて、教育実習時に何を見たのか、何を聞いたのか、影響は大きいようである。教育実習で実習生に何を伝えるのかを、教員は意識しておく必要があるであろう。

しかし一方で、やめたいと思ったときの乗り越え方を尋ねる質問など、教員の負担の大きさを不安視しながらも、教員という仕事の良さを見いだそうとする学生の姿も垣間見える結果となった。

3.3 キーワード「授業」に関連して

「授業を行う際最も気をつけていること」「意識していること」という漠然とした質問も多かったが、具体的な内容として次のような質問があった。

まず、授業準備段階のことである。「授業準備にどれくらい時間をかけるのか」「授業準備が間に合わないことはありますか。ある場合どうしていますか」という、授業準備の時間に関する質問がある。教育実習の授業で準備に時間がかかったこと、実際の学校現場を見て多忙だと感じたことなどから、授業準備の時間をどう確保しているのかが気になっているようである。さらに「授業研究や授業力向上のための学習時間はどのように取られていますか」「教材研究をやる時間はあるか」という質問も見られるように、教員になってからの勉強時間の確保についての質問もあった。これは印象ではあるが、なんとか授業を良いものにしたい、そのために勉強も続けたいという学生の意識を感じられる質問であった。

授業準備については、さらに具体的に、授業準備の際の板書計画について「授業づくりでは、板書計画が一番重要ではないか」と教育実習の際に感じました。どのような板書計画の書き方をしていますか。また工夫していることはありますか、「授業の時間配分を考える際、何か工夫されていることはありますか」などがみられた。指導の計画を立てる際の具体的なポイントを尋ねるものである。

次に、授業そのものについてである。これについては、授業の具体的な授業方法についての指導を大学での指導法の講義実習や教育実習での各学校で受けてきたせい、あまり多くはなかった。一方で、授業への参加意欲が低い生徒への対応に関する質問が少なくない。「クラスに落ち着きがなく

授業規律が危うい場合、どのように対処するか」「授業への参加意欲が低い生徒へどんな対応をとるようにしていますか?」「授業外での質問はどのくらい受け付けていますか? (授業を聞く気がない生徒からの放課後の質問、長時間にわたる講義の希望など)」など、大学の講義ではあまり扱えないが教育実習中に直面すると思われる内容についての質問が少なくない。「私は、教育実習の研究授業でアカムシのだ腺(注:原文のまま。だ液腺と思われる)染色体の観察実験を行ったのですが、女子高ということもあり、アカムシを配ったとたん、生徒が騒ぎ出してしまい、静かにしてもらおうのにと時間もかかってしまったのですが、実験の際に生徒にうまく指示を伝えるためのポイントなどはありますか?」のような具体的な質問もあり、現職教員にだからこそ質問しやすく、答えを得やすいと思われる質問がみられたことが、授業に関する質問に特徴的であった。「授業で問題集を使うことなどあると思いますが生徒に解答を渡す派ですか、渡さない派ですか(理由も含めて教えてほしいです)」のように、実習の期間中だけでは判断できないことを尋ねるものもあった。

また、昨今の教育現場を反映して、「コロナ禍で授業の形態はどのようにコロナ禍以前と変わりましたか?」などのコロナ対応と授業に関する質問と、「中学や高校の授業のオンライン化、ICT化は進んでいるのでしょうか?」といったICT活用に関する質問もあった。

以上、キーワード「授業」についてまとめる。

まず、授業準備に関することとして、①準備時間に関すること、②具体的なポイントの2つに分類できた。

次に、授業そのものについては、①授業への参加意欲の低い生徒への対応と、②教育実習での具体的な場面をあげてどうすれば良かったのかを問うものがある。

そして、最近の情勢を反映して、①コロナ対応と②ICT活用に関する質問が見られた。

3.4 キーワード「部活動」に関連して

部活動に関する質問については、そのほとんどが専門外の競技等の顧問になった場合のことと、労働時間に関することであった。

まず、専門外の部活動を指導する際のことが気になっているようである。具体的には、「自分が全く指導できない部活動の顧問あるいは副顧問になった場合、部活動の時間はどのような指導を行いますか?」「自分に経験のない部活動の担当になった場合、どのように指導していきますか?」「経験のない部活等に配属されたとき自分でルールなどを勉強するもしくは生徒の練習に混ざることかありますか?」などである。また、「指導したことのない部活の指導は断ることができるのか」という方向の質問もあった。経験がない競技等の部活動をどう指導すれば良いのか、または、経験のない競技等の部活動を断ることは可能なのかという、大きく2つの方向

の質問が見られた。

また、「教員」をキーワードにした場合の例で見たとおり、部活動の指導に時間をどれだけ割いているのかも質問事項にあがった。「部活動指導をしている先生は年間何日ほどの休みが取れるのか」「土日は部活動の顧問などがあると思いますが、しっかりと休めていますか？」などであるが、「部活動の顧問はその時間の給料がでない中でもやりたいと思いますか？そういったことが気にならなくなるようなやりがいなどのエピソードがあればお聞きしたいです」のように、モチベーションを維持するための具体的なエピソードを求めたいという学生の意識が感じられる質問もあった。学生にとって、部活動の顧問は大変な仕事であると捉えられており、近年の学校現場の長時間労働化の原因の一つとして部活動が意識されていることがわかる。しかし反面、それでも何かやりがいを求めようとする姿も見られた。

これに関連して、部活動をはじめとする校務分掌がどのように決められるのかを質問したものもあった。例えば、「学校の部活動や、委員会の役割はどのように決定しているのですか」のような質問である。

このほかには、部活動をめぐる生徒指導に関する質問が見られた。例えば、「盛んでない部活の顧問になった場合、生徒にやる気を出させるべきなのか」や「部活をめぐって保護者と生徒の意見が対立したときの指導法」である。

以上、「部活動」をキーワードとした質問は、①専門外の分野の部活動の顧問になった場合のこと、②労働時間に関すること、③部活動を巡る生徒指導に関することの3点に分類できた。この3点のいずれもが、大学の授業でも教育実習でも、十分に扱うことのできない事項である。

3.5 キーワード「時間」に関連して

すでに何度か出現した、教員の勤務が多忙で、時間に追われるということについての質問であった。教材研究や授業準備の時間について、勤務時間（実際の出勤時間や退勤時間）や残業時間、休日出勤の実態、「忙しいイメージがあって、どれくらいプライベートの時間を持っているのか」「趣味の時間は持てるか」といった仕事とプライベートの両立に関するものに分類できた。すでにここまで、他のキーワードで触れてきたとおりである。

このほか、自分が指導したことのない教科の勉強時間をどうするのかという質問が見られた。参加学生の多くは理工学部の学生である。理科の場合、教科「理科」として一つの免許であるが、大学では物理・化学・生物・地学と専門は細分化されて学んでいる。したがって、「自分は主に物理を学んだので地学には自信がない」というケースがあるためであろうと思われる。この種の質問をした学生たちの意見を参考に、大学としては、より不安を持たずに済む教員養成プログラムや支援策を考えていく必要があると考えられた。

3.6 キーワード「保護者」に関連して

保護者対応は大学ではなかなか学ぶ機会がなく、教育実習の現場でも経験しにくい事項であると思われる。

一般的に「保護者」をキーワードにした質問はそれほど多くなかったが、「保護者」をキーワードとした質問には、「保護者の方とうまく関わっていく秘訣」「保護者対応で気をつけていること」に加え、キーワード「生徒」でもあったような、意見の違う者の中で板挟みになった場合を想定した質問も見られる。具体的には「保護者に、内容が真逆の苦情や要望を出された場合、双方に対応をすることが不可能な場合は、どのように対応するのか」のようなものである。具体的な事例が示されていないことから、現場での経験をしていない学生にとって、何を優先させるべきなのかは机上の空論であり、心配ごとになっているように見える。さらに進んで、「保護者対応がづらいと聞くことがあるのですが実際どうですか？」「なかなか話を理解してくれない保護者の対応はどうしていますか」「生徒の保護者対応でこんな大変なことがあったなどありますか？言える範囲で教えていただきたいです」に代表される、保護者の過剰な要求の存在や保護者とのトラブルも学生にとっては気になるようである。トラブルにならないように、普段から保護者としてしっかりコミュニケーションをとる（学校便りなど）、学校全体で対応するといった「きれいごと」ではなく、「本当のところ」を知りたいという内容である。

以上、「保護者」をキーワードとした質問では、①保護者対応でのポイント、②相反する保護者からの要望など、主張の板挟みになったときのこと、さらに進んで③トラブルになったときの実際、という3つに分類できた。生徒や保護者の問題は、ケース・バイ・ケースである面もあり、なかなか簡単に解決できるような問題ではなく、学生への質問への具体的な回答が難しいものの、大学の授業や教育実習だけではすくい取れないような、より具体的な情報を学生は欲しているように思われた。

4. 学生との対話

本研究で示した調査を基に、教職大学院に所属する執筆者らと学生との懇談は、2020年12月14日に実施した。Covid-19の感染が拡大している時期であったため、オンラインで実施することになった。

本稿は調査の分析が主目的であるが、この節では対話の様子について簡単に報告しておきたい。学生へ何をどこまで伝えるか、どう伝えるか、ということを考えるきっかけになったためである。

初回の取り組みであったことから、慎重にならざるを得ない面があった。そのため、90分すべてを対話時間とはせず、学級担任となって初めて保護者に自己紹介するという設定

で行った自己紹介の時間を確保し、対話時間は60分ほどを予定していた。しかし、計画段階の心配に反し、学生からは積極的な発言（質問）が出され、対話の時間が不足してしまった。次年度以降、対話時間を長くする変更が必要だと考えられた。

また、現職教員として参加した教職大学院生としては、教職を目指していた頃、あるいは教員になりたての頃の気持ちを思い出し、教育実習生や初年次教員への対応の方法を考えるきっかけとなった。

終了後に本稿執筆者の一人が書いた感想を紹介する。

「学生さんたちの教育実習での率直な思いが綴られており、学生さんたちの振り返りにもなっているし、これから現場に立つ時の心構えになっているし、次の代の教育実習生への先輩と後輩をつなぐものにもなっていることが、よくわかりました。そして、私たち現職教員は、自分たちも経験したはずなのに、時間が経つと記憶が薄れてきていて、こんな緊張感や感動があったことも気にしないで、日々、目の前の生徒たちと過ごしてしまっていることも、思い出させていただきました」

この授業での、教職課程の最終段階の学生と現職教員との対話はお互いに得るものが多い企画となった。

そしてさらに、本企画は学生への進路指導のような性格も持ちそうである。3節ではトピックになりそうなキーワードを含む質問を中心に分類してきたが、それ以外の質問に、一足先に社会に出た社会人への質問、と一般化できそうな質問があった。

「ストレス発散にはどんなことをしているか」「今の日本をどう思うか。そして自分には何ができると思うか」などである。

そして、「今の日本の教育環境をどう思いますか」のような質問も見られる。

キーワード「教員」(3.2で述べた)に、民間企業就職と教員就職の間で揺れ動く学生の姿が垣間見えたが、教員を続ける秘訣や教員としての志など、もう一言の声かけで学生たちの進路決定に役立ちそうなこともある。一足先に社会に出た社会人として、一足先に教員になった者として、教員になるかどうか悩んでいる学生への進路指導としても位置づけられるのかもしれない。

しかし一方で、現職教員としてのアドバイスに葛藤もあった。「本当のところを、どこまで伝えていいのだろう」「教員の代表として自分の思いを話してしまっていいのか」等の迷いである。大学4年生である学生たちは本当の部分を知りたいという社会人となる心構えをしておきたいであろうと思いつつ、教員としては、もどかしさや、すっきりしない気持ちをどこかに抱えながらも、すべてを話せなかったという思いもあった。

教員の現場、社会人の現場を知っている先輩として、大学

4年生のこの時期に、何をどこまで伝えていいのか、考えさせられた。本稿では、現場のありのままを知りたいと思う学生のニーズを分析してきたが、一方で、現場のありのままをどのように知らせるのかは別の問題である。実際に対話を行ってみて、現場を知っているからこそ、どこまで話していいのかを悩むことになった経験から、「何を、どのように、どこまで伝えるのか」を今後の課題としてあげておきたい。

5. まとめ

高知大学の学生を例に、教職課程最終段階の学生が現職教員に何を質問したのかという視点から、教職を目指す最終段階の学生が欲している情報をまとめてみたい。

まずトピックとして、「生徒」「教員」「授業」「部活動」「保護者」をあげる。さらにその下位に出現した質問を分類し、次に示す。

キーワード「生徒」

①不登校、②生徒との関係を崩さないための方法、③けんかやいじめへの具体的な対応、④生徒と他の教員の主張が異なる場合の対応、⑤私生活での生徒との関わり

キーワード「教員」

A 教員になる前のこと

①教員になるきっかけ、②教員になるために学ぶべきこと、③民間への就職か教員就職課の悩みに関すること

B 教員になった後のこと

①働き方（勤務時間、プライベートとの両立など）、②教員間の人間関係、③教員になった後の勤務評価

キーワード「授業」

A 授業準備に関すること

①準備時間に関すること、②具体的なポイント

B 授業そのもの

①授業への参加意欲の低い生徒への対応、②教育実習での具体的な場面をあげてどうすれば良かったのかを問うもの

C その他

①コロナ対応 ②ICT活用

キーワード「部活動」

①専門外の分野の部活動の顧問になった場合のこと、②労働時間に関すること、③部活動を巡る生徒指導に関すること

キーワード「保護者」

①保護者対応でのポイント、②相反する保護者からの要望の板挟みになったときのこと、③トラブルになったときの実際

このほかに、「時間」もキーワードとして分析してきたが、そのほとんどが部活動や授業などに関連する「時間がない」「忙しい」といった観点での質問であった。

さて、上記の結果からは、より具体的な教員の仕事のイメージ、そして、生徒・保護者への対応（注意しなくてはならないような場面や、相反する意見の板挟みになったときのことなど、関係をどう作るのが試されるような場面のこと）が学生にとって課題となっているという傾向がうかがえる。

「時間」というキーワードもあがったとおり、時間的、能力的な負担（専門外の科目や部活動担当）の「本当のところ」を知りたいという学生の傾向を読み取ることができる。それに関連して教員か民間企業就職かに悩む学生の姿も垣間見えた。

これらを大学の授業と教育実習ですべてカバーすることは到底できない。しかし、学生たちのニーズとして、現職教員に実際の現場の姿を語ってほしいということがあるように見える。

一方で、現職教員が学生のニーズに応えることは単純なことではない。現場を知っているからこそ、何をどこまで伝えてよいのかという迷いが現職教員にはある。自分の経験が教育現場を代表しているわけではないし、自分の発言で教育現場のイメージを持たせ、それが学生の進路決定に大きく影響（特にマイナスの影響）してしまうことへのためらいもあった。今後、教育実習生に出会ったとき、学生たちのニーズの傾向は本研究で見えたものの、何をどこまで、どのように伝えるのが、今後の大きな課題として残っている。

教職実践演習で懇談の場を持たせたことは、学生・現職教員大学院生の双方に得るものがあつた。そして、懇談の経験と、それに先立って実施したワークシートの分析は、今後教育実習生を迎えた際に実習生に何を伝えるのかを考える一助となると思われた。今後、学生に対して「どこまで、どんな伝え方をする」ことが現実的かつ効果的であるのかを考えていく必要があるだろう。